

務取扱となったが、永井は竹内久一胸像と川端玉章記念銅碑の二点を供出することとした。ただし、その回答文書には十九年五月十八日提案とあるのみで、発送欄は空白となっているので発送には至らなかつたと考えられる。川端玉章記念銅碑の方は別に銅像があり、竹内久一銅像の方も別に長愛之原型制作の銅像があるため回収対象とされたのである。なお、永井に続いて校長に就任した上野直昭もこの二基の譲渡申込書を作成（十九年六月五日）したが、それも発送に至らなかつた模様である。さらに、十九年九月十五日には下谷区長山口寛雄から本校に対し、大島如雲胸像、白井雨山胸像、フェノロサ全身像を供出して頂きたいという申し入れがあった。回収実施は三日後で、自力で集荷場まで運搬して来いという乱暴な申し入れで、しかも「フェノロサ全身像」（本校にあるのは胸像を線刻した石碑）などという実在しないものまで挙げるという粗忽な誤りを犯している。それに対する回答の記録は現存していない。

このように、本校の銅像の一部は供出の危機に晒されたものの、幸いそれを免れ、全て現存している。しかし、民間の銅像の多くが供出され、錆潰され、戦争資材として消費されたのであった。

⑰ 戦時下の学生生活

野見山曉治氏談

〔本稿は昭和六十年三月十九日に野見山氏のお宅でお話を伺った際の録音（聞き手、村田哲朗）を纏めたものである。その本校在学時代（昭和十三年～十八年）は、氏が『祈りの画集 戦没画学生の記録』（93頁参照）に記しているように、まさに「戦争に向って雪崩現象を起こしている時世」であった。〕

受験の頃

私は福岡県の出身だが、中学の絵の教師は日本画の先生で、日本画をやれと盛んに私に勧めたものだ。日本画ならば指導できるが、油画の入学試験は自分にはわからないということだった。石膏像は描かされていたが、先生の専門ではなく、四年のとき、私は東京美術学校（以下美校と略す）の油画科を受験したが不合格だった。

中学の卒業試験を終えて直ぐに上京した私は、田舎の先輩の画家の厚意に甘えてそのアトリエに住むことにし、乃木神社の下にあった小林万吾の画塾、同舟舎へ行って、そこでデッサンの受験勉強を始めた。当時、美校の予備校といえは本郷研究所、川端画学校、およびこの同舟舎で、それは小林先生の邸内にあり、三、四十人ぐらの生徒が石膏デッサンをやっている、普段は、同じ邸内に家をもらって住んでいた前田という助手が指導していた。私が入ったのは入試まであと一カ月半という時であったから、教室はもう殺気だつていて、前田さんはいち／＼私に、パンでこうやって消すんだ、などと初歩的なことを面倒くさそうに言っていた。私のデッサンが余程かけ離れて、つまらなく見えたためだろう。

入試の一週間か四、五日前にコンクールがあり、前田さんが見立けて皆のデッサンをトップから順に並べた。私と同じく中学を出たで、まだ一カ月半くらいしかやっていない四、五人のものは、歯牙にもかけないといった感じで一番最後の方に並べられた。並べ終わって前田さんが小林先生を呼びに行くと、先生がやって来て――私が先生に会ったのは入所の挨拶の時とこの時の二回だけだった。

——上位のものについては、これは通るとか、この調子で行けば来年、とか言って、あとはそれぞれのデッサンについて批評をされた。私ののはピリから二、三番に並んでいて、もうそのあたりになると、ものになるかならぬか判らないといったことだったが、私のデッサンの前に来た時、これは誰が描いたのかと尋ねられた。そこで手を挙げると、どういう指導を受けて来た者かと言われる。私の絵は他とまるっきり違って、よく、現役で地方から出て来て初めて描いた絵、例えば分厚く輪郭を取って、唇などは、朱で描いたよいうな、まるで三枚目になったアグリッパとかがあるが、それに近かったのではないかと思う。ただ、私は中学一年生のときから描いていた。すると、先生は皆に向かつて、これ（私のデッサン）は、面は出ていないけれども、石膏の重さが出ているのでよく見るように、と言われた。私はこんなことで褒められたのは生まれて初めて、とても嬉しかった。恐らく、先生はその時にこの男は美校に入れようと思われたに違いない。今から考えると、川端画学校にしろ同舟舎にしろ、予備校というより寧ろ藤島先生なり小林先生なりの塾といった性格のもので、その先生に就きたいという人はその塾に入り、もっとその先生に就いて勉強したい人は美校に入ってその先生の教室に行くことだったのではないかと思われる。先生の方も、もっと本格的に鍛えようという者だけを塾から自分の教室へ入れたのであって、今の予備校の形式とは大分異なる。

入試

当時の志願者は二百人足らずで、今と比べれば大した倍率ではなかった。しかし、みんな真剣な若者ばかりだった。実技試験は石膏

デッサンで、確か二日間描いたと思うが、それまで見たこともない胸像が出た。学科は歴史と作文で、歴史は支那と日本の文化の関係を時代順に述べよ、という問題だった。その外に面接があり、居並ぶ先生たちに出身とか趣味について質問された。私が美校へ行って一番に感じたことは、先生方の服装だった。岡田三郎助にしても藤島武二にしても、三つ揃えを着ていかにもイギリス紳士といったイメージで、その服の仕立てを見ると、うちの親父たちの、あれは洋服ではないという気がするほど違っていった。

美校生時代

入学して最初の一年は予科と言った。まだ正式に本校の生徒ではない、従ってつまらない生徒はそこで落としてしまおうという風な制度だったわけだが、私たちの時は大体自動的に本科に進むことになっていった。予科の一、二学期は石膏デッサンばかりで、先に述べたような塾から来た連中は、浪人している人ほど上手い。彼らは長い間描き慣れているから手口が決まっていて、やり方がすごく要領よくなっている。私はとてもこんなものには敵わないと思い、悲しい気持ちだった。こんなことばかりやらされるなら美校を止めようかな、とも思った。つまらないところだな、とも思った。ところが二学期になると裸婦の木炭デッサンとなる。石膏と違って裸婦は誰も初めて見るかたちだから、皆そこできかなり面食らって、成績の序列が完全に変わって来た。まして、本科になって、今度は油絵の裸婦を描く段になると、絵の具と木炭は使い方が違うから、石膏であればど上手かった奴がカチ／＼の裸婦を描くとかして、それまでのことは御破算になった。

モデルを選ぶのは生徒の役目だった。学校の近くに宮崎というモデルのクラブがあって、土曜の午後に次週のモデルを級長はじめ生徒たちが選びに行く。モデルさんたちが大勢、畳の部屋に居るのを、上がり框から眺めて、「あの毛糸編みしている娘なんか、よさそうじゃないか。」とか言って、「ちょっと、ちょっと、その人、あんた来週空いているか。」とか交渉する。そして、一週間単位で来て貰い、ポーズも、級長が大体のかたちをつけると皆がこうしてくれ、ああしてくれと注文し、かなり時間をかけて決めるのだった。

予科は担任の田辺（至）先生が最も多く指導にあたられたが、他の先生方も回って来られたので、一通り面通しさせて頂けたわけだ。藤島先生はとても厳しかった。岡（四郎）さんが、先生はもう教官室に来ておられるから三十分くらいしたらこの教室に来られる、と言うと、皆はパン屑とかを取り片付けて、身の回りを綺麗にしたりして緊張していたものだ。しかし、小磯（良平）さんに聞いた話では、あの頃は事務長から黒田（清輝）先生がお見えになったと連絡があり、鍵穴から覗いて見ると、事務長が先頭に立ち、次に黒田先生が居て、その後には和田英作とか藤島武二とかが従い、病院長回診のような感じでしすしすとして来るのが見えて、もつとすごかったらしい。

藤島先生は生徒のデッサンを徹底的に直す。早く消せ、全部消せ、ちゃんと消せ、などと言っている／＼して、その通りにすると、こういう風にかたちは取るんだ、と言って、三十分くらいかけてその絵を描いてみせてくれた。志村（正雄）の場合など、先生が

完璧に描いてしまったので、後で「これ、先生にサインして貰えないだろうか」と。とにかく先生は怖かった。私は直されるのがとても嫌だった。

岡田先生は、徹底的に直すということはしないが、例えば自分勝手な調子を入れてあったりすると、そういう風にモデルは見えないのだから、見えた通りにやり直せ、というように言った。そして、静かに後ろでずっと待っている。拗ねた奴がいて、やらなかったら、君は学校を止めて頂くといい、本当にきっちり止めさせることにした。そこで生徒の親代わりのような役目の岡さんが、拝むようにして直させて、その生徒を教官室に連れて行ったりした。

本科に進む時、私は南（薫造）教室を選んだ。というのは、前に述べたような具合で藤島教室は川端画学校出の人が皆入るから、教室を覗くと生徒がわん／＼居る。小林教室、岡田教室も同様に大勢居る。南先生だけはご自分の塾を持っておらず、従って非常に生徒が少ないから、のびのび描けるだろうと思ったのだ。教室志望届けの日まで私は届け出をせず、そういう事務を担当していた退役軍人に呼び出されて、馬鹿者、とか何とか怒鳴られた。——学生を怒鳴りつけたりするのは退役軍人だった。——貴様だけだ、と言うので、じゃ、皆出しているんですか、と聞くと、出している、と怒鳴る。そこで聞いてみると南教室が二人だけだったので、そこに決めた。ただ、今考えると、南先生が生徒の絵を直したり、あるいはもの見方とかを強制したりしないことが大きな理由だったように思う。かくて、私は卒業まで南教室で自由にやっていた。しかし、途中で岡田先生が亡くなられて、その生徒たちが合流して、ふくれ

あがった。

美校では絵の具の使い方とかいった技術的な事柄を教えるということは無く、ただ折々に、生徒のやり方を見て問題があれば教えるといった具合であったから、みんな中学の時に描いていたその儘の延長でやっていたようだ。今になって見ると、確かに片手落ちだったと思う。ヨーロッパでも後期印象派あたりから技法をきちんと学ぶという伝統が崩れてしまったが、美校は学校であるからには寧ろ技術的な事柄を教えるべきであった。一方、表現については、フランス直伝の方法で西洋画はこう描くものです、というように、厳しく指導した。私は当時はフォーヴィズムに魅せられていて、家では密かにそういう画集ばかり見て真似して描いていた。だから学校で描くのと家で描くのとでは多少は違っていた。

風景コンクール

子科から本科を通じて毎年一回、風景コンクールがあった。十月頃、二週間くらい各自が行きたい所へ行って風景の油絵を一点か二点描いて来る。その時の絵をいまも持っているが、十号だったと思う。当時は絵の大きさというものは、別に規定するまでもなく、そんなものだと皆が思っていたのかも知れない。このコンクルールのときは、皆と信州の山の中へ行ったり、佐渡が島へ絵の具箱を担いで出掛けた。当時の私たち美校生は絵の具箱とスケッチブックを、学校へ通うのに、いつも携帯していた。風景は、作品を提出しても批評するだけで採点はなかった。私は他の課題の点数は悪かったが、風景コンクールのように採点しないものは褒められた。

学科

実技は、課題の提出を怠らなければ出席率は問題にならなかったが、教練や学科はそれがやかましく、私は四年生のときに肺浸潤で二カ月ほど欠席したため日数が足りず、留年となった。学科には学期末試験がある。森亀（森田亀之助）さんの西洋美術史は面接試験で、生徒を四、五人並べて「カタコンベというのは何時の時代？」とか訊かれる。私は最後に遅れて行って、大塩（麟太郎。戦死）と二人で並んだ。カタコンベと言われても二人とも黙って答えない。先生は「答えないと落第だな。」と言う。すると大塩曰く、「あの、古いもんです。」先生は「ようし」と言って及第にしてくれた。

フランス語の新（規矩男）先生は厳しかった。同級生に大阪外語でフランス語を習った庄司栄吉が居て、フランス語の試験のとき、彫刻科の某が彼を自分の身代わりにして私の前の席に座らせた。その答案を私の隣の席にいたTが借りて、二人で写そうということになった。必死になって写していると、ぼんつと背中を叩かれた。先生は、「君たち二人は答案を出さなくてよろしい。」と、ゆっくりと言われる。結局、例によって岡さんが「二人は非を悔い改めておるから追試験をして貰えませんか。」などと先生にお願いしてくれて、二人で追試験を受けた。最早カンニングはできないから、私は庄司のところへ行つて、テキストに使われたドーデの「風車小屋便り」を勉強した。村田良策先生は論文の試験で、何か自分の書きたいことを纏めろというようなことだったので、私は丁度女の子に惚れていたので恋愛とは何か、などということを書いた。村田先生の担当は美学と英語で、日本美術史が正木篤三、教職科目の図学は広川松五郎の担当だったと思う。

教 練

教練は毎週二時間やることになっていたが、九時から殆ど午前中いっぱいかかってやった。時間に遅れないようにと、前日から緊張するほど厳しかった。現役の配属将校が教官として来ていて、怠けると卒業して兵隊にとられる時、将校不適格の烙印を押され、現地の一番殺され易い所へ直ぐに連れて行かれるとか、専門学校を出ていながら将校不適格というのは、——当時は中学以上を出た者には幹部候補生の資格があった。——余程ふて腐れた奴だと見なされ、性根を叩き直してやると称して徹底的にいじめられると言われていたので、皆恐れていた。しかし、生徒たちにはかなり反戦的な気持ちがあった。というのは、軍人というのはやはりこの学校の中では異質であって、ロダンの青銅時代などは敵国の作品だから壊せなどと言うが、私たちはいかに戦争中とはいえ、あれを敵国の人間の作品だというような目で見ることはない訳で、あいつらの言うことはきかない方がいいといった気持ちがあった。油画科では特にその傾向が強く、それまで戦争で止めになっていた芸術祭をどうしても復活させたいと言って、油画科が主になって実施したことがあった〔昭和十五年十二月——編者註〕。ところが、そのことを校長に要求すると、配属将校の許可を得てくれと言う。その頃は校長もすでに配属将校にはお手上げで、怖かったのだろう。

四年生のときだったか、その配属将校が、全生徒に丸坊主になるよう命令した。殆どが従ったが、中に十人ばかり実行しない者が居て、私もその一人だった（内心は怖かったが）。すると教官室に呼ばれ、「お前たちは非国民である。日本は戦っているのに何と思っ

ているか。この次までに丸坊主になって来なかったら直ぐ退学させて、兵隊として現地に送る。」と威嚇された。真っ青になった私たちは、その次には頭を刈って来たが、ただ一人、韓国人のTさんは、髪の毛をみな制帽のなかに入れて丸坊主のように見せてやって来た。教練の最中、将校は何かおかしいと気づいて、帽子をとれと命じた。彼が帽子を脱ぐと、下から髪の毛がうじゃ／＼とかぶさった。将校は「貴様あ」と言って、いきなりTさんを殴った。途端にTさんは興奮して、銃を捨てたかと思うと将校を殴り返した。学生が将校を殴るなどということはありえないことだったから、その将校はあつと思つて怯んで、ひっくり返った。Tさんはそれに馬乗りになり、さらにぼこ／＼殴った。すると、遠くにいたもう一人の将校がそれを見つて、「貴様あ」と、刀を抜いて駆けて来た。それでTさんは門の外へ逃げて行ってしまった。そのため彼は退学になったが、結局後で復学が許されたと聞く。それは将校の経歴に傷が付くのを避けるための処置だったらしい。私たちはというと、「やった、やった」と言つて手を叩いていたりしたのだから、後で岡さんが心配して、皆を集めて、それは大変だった。

当時は自分の子供が絵描きになるのを肩身が狭いと思う親が多く、私の友人の中にも勘当されて出て来た人がいた。だから、本当に絵が好きならばかり美校に来たとも言えるのだが、将校などは、この時勢に絵を描いているような学校に配属されて、嫌な所へ来たと思つたことだろう。ある時、身体の具合が悪く、教練を見学することを許された生徒がいて、彼は当時の学生たちがたいい手にしている岩波文庫本を座って読んでいたため、教官に注意された。だ

が、彼は「教練を見学するくらいならこれを読んだ方がずっといいんです。」と言って止めない。そのため酷く殴られたが、いくら殴られても止めなかった。このように、美校生は概ね反抗的だったが、中には非常に教練が好きなのもいて、私達にはそれが教官側のスパイのように見え、密かに嫌な男だなあと思っていたが、彼らとて、ただあのような規律の中でばばっと走ったり、要するに身体を動かすことが好きだというだけのことだったのである。なお、平常の教練の外に、年一回、五日間くらいの野外演習があり、毎年、富士の裾野とか外房の方へ行かされ、また、年一回の査閲があり、本場の偉い軍人が教練の実態を視察に来た。この日は全校生徒が制服に、靴、ゲートル、革バンドに銃剣を着けた姿で兵隊の真似をさせられた。

戦時下の自由主義

戦争が激しくなるにつれて、戦争こそ日本人の使命だという風潮が美術の方にも広がって来て、陸軍美術展、戦争美術展、海洋美術展等々沢山出て来た。それに入選すると新聞が取り上げ、名誉なことであるばかりか、特に絵の具が逼迫して来た時期にあつて入選者には絵の具の配給があるということだったので、生徒の中にも戦争画を描こうと言う者、出品したら得だと言う者、いくら貰えても俺は嫌だと言う者など、クラスの中も戦争に積極的に協力する者と反対する者との割れが生じた。また、その頃、各専門学校に対して海軍の将校をつくるための予備学生が募集され、各新聞が、例えば明治大学では五人応募したとか早稲田大学では十人応募したとか書き立てて煽った。となると、美校では誰も出ないのか、などと配属将

校がけしかける。そこで誰かが応募し、全生徒が講堂に集められて壮行会が行なわれた。私などは「どうせ俺たちも兵隊に行くのに、何も早まって行くことはないじゃないか。なんで俺たちまでかき集められて壮行会をやらされるんだ。」などと友人たちと言っていた。つまり、生徒の中に戦争派と反対派が出来て、友情が陰悪になったのである。私は別に確たる信念を持っていたわけではないが、椎名町のアトリエ村に住んでいて、その反戦的な空気を吸っていたことや、教練が得意でなかったことから、何か戦争というものは良くないものだという気持ちがあった。

そのような仲間割れに対して、実技の先生たちは全然知らん振りをしていた。恐らく彼らはある意味で自由人、ないしは西洋かぶれした男たちだったのではなからうか。油絵の先生たちは配属将校と、口をきいたことなどなかったに違いなく、学校をめちゃ／＼にするものだと言っていた。彼らは、今の人のような国家公務員だという意識は無く、かなり自由に生きていたと思う。例えば、南先生などは、火曜日と木曜日が出勤日だったが、「もしその日、天気だったら私は出ません。」と、南教室に入った最初の日に言われた。天気ならばゴルフに行くのだという。更に、「雨の日は、私は雷が非常に怖いから、やはり来ない。曇りの日には来る。」と言われた。だから、学校にはあまり来られなかった。生徒の私の方も、自分のアトリエの周りが藪や畑や森だったので、百姓家にキャンパスを預けておいて、しょっちゅう描きに行っていたりしたものだから、あまり学校へ行かない。卒業式の日には南先生が「あなたは私の教室でしたか。」と言われた。

藤島先生にもこんな思い出がある。ある時、先生が来られるというので、私たちは緊張して待っていた。先生は教室に入って来るや、つか／＼と裸でポーズしているモデルのお京さんの側へ行き、「相変わらずきれいだねえ。」と言って、下から上まで眺め回す。

「先生、お爺さんの癖に。お幾つになられました。」とモデル。「フランスでは年は聞かないもんだよ。」とか先生は言う。そのやりとりを、私たちはしーんとして見ていた。今の私らがそんなことをすれば、学生に馬鹿にされるのが落ちだが、生徒はそれでも先生を尊敬し続けていたのだから、先生は偉かったのか、いい時代だったのか。先生は、お気に入りユキ坊というモデルが来ている時は、お触れが出る前にさっさと教室に飛んで来るような人だった。また、広小路からちょっと入った所にプリンスという喫茶店があって、私たちはよく学校の帰りにそこへ寄って、銘々が俺はあの娘、とか言っ張って張り合ったものだが、先生もそこへ来て張り合っていた。そういう大人をそれまで見たことがなかった私は、ああ、藤島さんは芸術家だ、本当の自由人だなあ、と思ったものだ。

卒業

卒業制作について、学校から特別な指示は何も無かった。提出した作品は成績順に陳列館に並べることになっていたが、最後の三、四点は部屋の外へはみ出してしまふ。だから、お袋が来るなら、あそこは困る。私はアカデミックな勉強を拒否していた部分があった。成績は良くなかったが、それでもビリから四、五番目に入れば部屋の中に飾って貰えると願っていた。寺島竜一や庄司栄吉はトップを争っていた。しかし、結局私は病気で彼らより一年遅れて卒

業ということになった。美校では卒業制作と一緒に自画像も提出することになっており、そのために学校から制作費が支給され、自画像は学校に残すのが慣例となっていた。ただし、それは昭和十七年の卒業生までで、私が卒業する時は既に繰上げ卒業が行われており、制作費は支給できないから自画像は出さなくともよいということだった。

私のもとの同級生たちは卒業した途端にみんな兵隊に取られた。そして、私がまだ学校に居る間に、鼓膜を破られて耳が聞こえなくなったとか、その他負傷して帰って来た生徒が出はじめた。だから、私はもっとダブって卒業しないでいようか、などと考えていたが、十八年暮れには学徒出陣で結局全生徒が出ることになってしまった。